

各学校・課程・学科の垣根を超える高等学校改革推進事業に
おける指定ネットワークの伴走支援・研究

令和7年度報告書（概要版）

未来は、つくれる。

KATARiBA

Shape the Future

事業趣旨

○学びの機会の充実ネットワークの構築

文部科学省では令和6年度から令和7年度において、全国11地域を実証地域に指定し、「各学校・課程・学科の垣根を超える高等学校改革推進事業（学びの機会の充実ネットワーク事業）」を実施

○背景

令和5年8月の高等学校教育の在り方ワーキンググループ中間まとめにおいては、こうした課題を解消するために、地理的状況や各学校・課程・学科の枠に関わらず、いずれの高等学校においても多様な学習ニーズに対応し、潜在的なニーズに応える柔軟で質の高い学びを実現し、全ての生徒の可能性を最大限引き出すことができるようにしていくべきであり、このための方策として、教科・科目充実型の遠隔授業や通信教育の活用、学校間連携等の促進等を一層進めていくことが重要とされている。

これらも踏まえ、遠隔授業や通信教育を活用した積極的な学校間連携等のネットワークを構築するための配信センターについて、その取組の伴走支援を行うとともに、学校間連携等に取り組む上で有効な制度等の調査研究を実施する

（伴走支援・調査機関：認定NPO法人カタリバ）

運営指導委員（敬称略）

千葉大学教育学部 教授	貞広 斎子
東北学院大学文学部 教授	稲垣 忠
国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部 総括研究官	植田 みどり
札幌新陽高等学校 校長	北村 善春
信州大学 名誉教授	東原 義訓
鹿児島大学 法文学部 准教授	平田 祐太郎

実証地域（学びの機会の充実ネットワークの構築）

実証地域	構成校等
岩手県	岩手県立杜陵高等学校/葛巻高等学校/西和賀高等学校/花泉高等学校/山田高等学校/種市高等学校/伊保内高等学校
山形県	庄内配信ベースセンター(SSBC)/加茂水産高校/遊佐高校/庄内総合高校
静岡県	静岡県総合教育センター/静岡中央高校/伊豆総合高校/伊豆総合高校土肥分校/松崎高校/浜松湖北高校/浜松湖北高校佐久間分校/稲取高校/下田高校/下田高校南伊豆分校/熱海高校/川根高校/天竜高校春野校舎
名古屋市	名古屋市教育委員会学びの改革推進センター/菊里高校/向陽高校/桜台高校/北高校/緑高校/富田高校/山田高校/名東高校/西陵高校/名古屋商業高校/若宮商業高校/工業高校/工芸高校/中央高校
島根県	島根県教育センター/宍道高校/浜田高校/安来高校/情報科学高校/松江北高校/松江南高校/松江東高校/松江工業高校/松江商業高校/松江農林/大東高校/横田高校/三刀屋高校/三刀屋高校掛合分校/飯南高校/平田高校/出雲高校/出雲工業高校/出雲商業高校/出雲農林高校/大社高校/大田高校/漣摩高校/島根中央高校/矢上高校/江津高校/江津工業高校/浜田商業高校/浜田水産高校/益田高校/益田翔陽高校/吉賀高校/津和野高校/隠岐高校/隠岐島前高校/隠岐水産高校
高知県	遠隔授業配信センター(高知県立岡豊高等学校教育センター一分室)/室戸高校/中芸高校/嶺北高校/佐川高校/窪川高校/構原高校/大方高校/清水高校
長崎県	長崎県遠隔教育センター/豊玉高校/宇久高校/奈留高校/北松西高校/中五島高校/平戸高校
熊本県	県立教育センター/第一高校/小国高校/球磨中央高校/牛深高校/岱志高校
大分県	大分県教育庁遠隔教育配信センター/国東高校/大分南高校/情報科学高校/中津南高校/臼杵高校/佐伯鶴城高校/日田高校/宇佐高校/高田高校/杵築高校/別府鶴見丘高校/竹田高校/玖珠美山高校/安心院高校/三重総合高校/久住高原農業高校/中津南高校/耶馬溪校/別府翔青高校/大分上野丘高校/大分舞鶴高校/大分雄城台高校/大分豊府高校/大分西高校/爽風館高校/大分鶴崎高校/大分東高校/由布高校/津久見高校/中津北高校
宮崎県	宮崎県教育研修センター/五ヶ瀬中等教育学校/高千穂高等学校/延岡星雲高校/延岡高校/日向高校/高鍋高校/高鍋農業高校/妻高校/宮崎北高校/宮崎大宮高校/宮崎南高等学校/宮崎西高校/宮崎海洋高校/小林高等学校/飯野高校/日南高校/福島高校/都城泉ヶ丘高校/都城西高校
鹿児島県	鹿児島県総合教育センター/種子島中央高等学校/屋久島高等学校/大島北高等学校/古仁屋高等学校/喜界高等学校/徳之島高等学校/沖永良部高等学校/与論高等学校

現状課題

地理的状況に伴う制約により
自校で受講できる科目に限りがある生徒



- 難関大学を目指したいが、自らの習熟度にあった授業がない
- 物理学を学びたいが、同級生に選択希望者が少なく開講されない
- 商業系科目を履修したいが、地元には普通科高校しかない
- どの授業も同じクラスメイトと少人数で受講するため、多様な意見に触れにくい

さまざまな事情で
自分の通う学校の教室のなかで学ぶことが難しい生徒



- 学習意欲は高いが、教室に入ることができない
- 病気療養のため、長期間入院する必要がある
- 留学等のため、在籍校で卒業に必要な科目の単位を取ることができない

遠隔授業

配信拠点の体制・環境整備

授業ノウハウの集約・蓄積

授業者に必要なスキル

見取りの質

連絡調整体制

ニーズ把握

開設科目拡充

遠隔授業の効果的実施方法の検証

遠隔授業が効果的となる生徒側の条件および環境条件

学校間の連携を効果的に実施するための方策

多様な受信体制の試行・実証

巡回型体制が機能する条件／受信側教職員の役割等

教員以外の職員（受信側職員）配置

自宅や支援センター等での受信

垣根事業
学びの機会の
充実ネットワークの構築を
通じた実証

通信教育

在籍校における対応

対象生徒の把握

教員の関わり

教務規定の調整

配信センターや拠点となる通信制高校との連携

配信拠点からの教材提供

面接指導ノウハウの活用

在籍校と連携した個々の生徒に合わせた指導の実施方法

指導実施関係：通信教育における学習保障

学習状況の見取り

効果的な添削指導・教材配信

履修・単位認定の在り方

学期中における履修方法の切り替え

単位制への移行

オンデマンド教材等による学習の質の担保

効果的なオンデマンド教材

添削課題との効果的な組合せ



少子化が加速する地域における教育条件の改善および
生徒の多様なニーズに応える柔軟で質の高い学びの実現



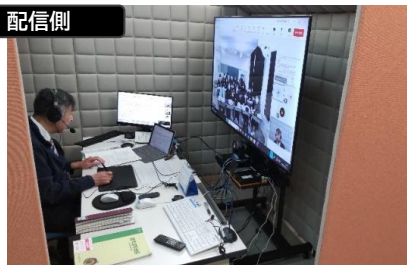
- 各自の希望する進路に応じた科目が受講可能になる
- 受講希望者の人数に関わらず希望する科目が受講可能になる
- 生まれ育った町で専門的な学びを深めることができる
- 他校生徒との交流により視野を広げることができる

- 保健室や支援センターから学び続けることができる
- 自宅で体調を整えながら授業に参加することができる
- 卒業を遅らせることなく必要な単位が修得できる

遠隔授業配信の様子

配信環境の様子

配信側



▲着席した状態で授業を行うタイプ



▲立って授業を行うタイプ

「遠隔授業独自の長所を活かしやすい環境」「対面授業と変わらないスタイルの実現」など、各地域の考え方に応じた多様な配信環境

受信側



ツール活用



机間巡視支援アバター



メタバースの活用

各地域における遠隔授業推進の在り方

	分類	特徴
教科・科目充実型	習熟度別/ハイレベル科目対応 (進学ニーズ対応)	<ul style="list-style-type: none"> 目的：生徒の大学受験ニーズへの対応 事例：習熟度別による科目開設（ハイレベル科目・講座） 数学・英語等が主な対象 備考：当該科目の教員が受信校にいる場合に該当 配信拠点型による実施が適合
	開講科目拡充① (進学ニーズ対応)	<ul style="list-style-type: none"> 目的：専門教員の未配置科目への対応/大学進学ニーズ対応 事例：理科や社会等が主な対象 備考：配信拠点型・学校間連携型どちらも適合
	開講科目拡充② (必修科目対応)	<ul style="list-style-type: none"> 目的：専門教員の未配置科目への対応/必修科目への対応 事例：情報Ⅰなど 備考：大人数の授業（20名程度以上）になりやすい
	開講科目拡充③ (多様な選択肢拡充)	<ul style="list-style-type: none"> 目的：専門教員の未配置科目への対応/幅広い選択肢拡充 事例：情報Ⅱ、実業系の多様な科目開設など 備考：学校間連携による実施が適合
教師支援型	授業内容の充実	<ul style="list-style-type: none"> 目的：専門的・発展的な学習ニーズへの対応 事例：スポットでの配信（教師支援型） 特徴：学校間連携による実施が適合

▶各地域においては、**それぞれが抱える教育上の課題や地域特性を踏まえ、遠隔授業を推進する目的を設定している**。目的の置き方や重点の所在は一律ではなく、地域ごとの状況や政策的意図に応じて異なっている。**複数の目的を合わせたり、趣旨を部分的に重ね合わせたりしながら、総合的に遠隔授業を展開している事例が多く見られる。**

▶今後、**教育課程内での遠隔授業の導入を検討する地域においても、推進の過程で適宜、目的を整理した上で進めることが有効である**と考えられる。

遠隔授業実践のポイント（令和6・7年度の各地域の事例から抽出）

配信者教員を対象とした令和6年度アンケート調査／令和7年度前半に実施した配信者教員向け分科会での発言内容や事後アンケート／令和6年度～令和7年度にかけて実施した遠隔授業見学およびその後のヒアリングに基づき、今後の授業改善のヒントとなり得る観点・ポイントを抽出

遠隔授業にも活きる授業づくりの視点		
つくりたい授業のかたちを考える		
授業づくりの指針を立てる	遠隔授業を実施するうえで、授業者として大切にしたいことをもとに、つくりたい授業のかたちを考えます	
目的に応じた方法の整理	つくりたい授業のかたちに応じて活動や評価の方針を立て、使用する教材やツールを整理します	
学びをうながす仕掛けをつくる		
自律的な学び	目標や評価基準の共有	目標や評価観点を事前共有し、生徒自身が自己評価や相互評価を行えるようにします
	生徒主体の活動時間の設定	単元もしくは授業の中で、生徒がみずから考え活動する時間を意識的に設定します
	自律に繋げる振り返り	活動後に生徒が学びの過程を振り返り、次の行動を考えることができるよう促します
個別最適な学び	教材・記録のクラウド共有	授業で使用した教材や記録をクラウドにアップロードして、いつでもどこでも生徒がアクセスできるようにします
	多様な取り組み方の提示	手書き・デジタル入力・音声・動画など複数の方法を提示し、自分のスタイルに応じて選択できるようにします
	個別の学習フィードバック	チャットやメッセージを介し、生徒の疑問や振り返りに返信したり、成果物にコメントしたりと個別対応の機会を作ります
協働的な学び	多様なアイデアの表現と共有	共同編集が可能なツール上に表現された互いの考えや成果物に対して、フィードバックや相互参照ができる環境をつくります
	遠隔ならではの出会い創出	遠隔授業の特性を生かし、校外と積極的に接続することで多様な価値観や視点に触れる機会をつくります

距離を超えて生徒が参加できる工夫と連携		
離れた場所にいる生徒との関係を構築する		
生徒の背景理解	受信校の学習環境の理解	受信校の機材や教室の配置、生徒が使えるツールなどを事前に把握します
	学校生活の様子の理解	受信校の時間割、行事予定、通学環境など、学校生活に関する基本情報を把握します
	生徒一人ひとりの理解	受信校と定期的に連絡し、希望進路・習熟度・支援上の配慮事項などを把握します
生徒の状況把握	生徒の声を拾う仕組み	チャット、メッセージ、リアクションボタン、アンケートなど、生徒と配信教員を繋ぐツールを複数用意します
	学びのプロセスの可視化	生徒の思考の過程や取り組み状況を可視化し、授業者の声かけや生徒の協働のきっかけとして活用します
信頼関係の醸成	生徒一人ひとりとの個別コミュニケーション	授業中に名前を呼びかけたり、個別のチャットや面談でのやりとりを行います
	肯定的なフィードバック	授業への取り組みや思考の過程等から良い点を見つけ、前向きな声かけを意識的に行います
	教員の自己開示	教員自身の経験や感じていることを言葉にして共有し、親しみやすさや信頼感を高めます
多様な生徒が取り組みやすい授業の土台をつくる		
受信校と連携した学びの基礎づくり	受信校との相互理解	受信校側と互いの役割を確認するとともに、それぞれの立場で見える状況や視点を共有します
	遠隔授業の円滑な実施に向けた支援	受信校と連携して、機器・ツールの操作方法や、トラブル発生時の対処方法、遠隔授業が開講される目的等の理解を深める支援を行います
伝え方の工夫	メリハリの意識	対面授業以上にはっきりとした表情やジェスチャー、声のトーンなどを意識的に用います
	授業展開の明確化	授業展開や指示内容を明確に示すことで、生徒がスムーズに授業の流れを理解できるようにします
	情報量の調整	スライドの内容を絞ったり、見るべきポイントを明確にしたりすることで生徒が情報を受け取りやすくなります

各項目の詳細および対応する実践事例は「令和7年度 遠隔授業実践ポイント集」を参照

遠隔授業に関するアンケート調査(生徒)

調査期間: 2025/11/17～2026/1/16 n=生徒581(遠隔授業受講者)/教員32(配信者)

遠隔授業に対する効果および評価

質問項目	肯定的回答率(%)
この授業を受けて、この教科・科目に興味関心が深まったと思う	79.86
この授業を受けて、学習内容を理解できたと思う	87.04
この授業について、どの程度満足していますか	88.59

▶**興味関心・学習理解・満足度それぞれ80～90%が肯定的回答(生徒)**

授業実践の工夫に対する生徒の認識

*各設問は全国の遠隔授業の実践の中で抽出された具体的な工夫を参考に設定

質問項目	肯定的回答率	項目平均
「あてはまる」「どちらかといえば、あてはまる」「どちらかといえば、あてはまらない」「あてはまらない」の4件法で回答を求めた		
授業の流れや目標がはっきりと示されていた	93.52	3.44
先生の話聞くだけでなく、自ら活動する時間が十分にあった	90.42	3.39
クラスメイトと活動する際に、自分の役割を理解して、自分から動くことができた	85.07	3.19
共同編集ツール上で、共同制作を行ったり、クラスメイトの意見や考えを確認し、取り入れる機会があった	76.19	3.00
他校生徒や学校外のゲストとつながる機会があった	39.58	2.16
配付資料や授業記録にインターネットを介していつでもアクセスすることができた	87.46	3.27
同じ活動でも複数の取組方(手書き/デジタルなど)の選択肢が提示されていた	69.02	2.84
先生はチャットやメッセージ機能などで個別に学習をサポートしていた	65.49	2.74
先生は生徒一人ひとりに目を向けて、コミュニケーションしていた	81.97	3.12
先生は自分やクラスの良いところについて積極的に声をかけていた	80.85	3.10
先生は積極的に自分の話(自分の考えや体験の話)をしていた	88.17	3.30
授業中は複数の方法(チャット・メッセージ・リアクションボタンなど)から選んで先生とコミュニケーションをとることができた	69.29	2.87
授業後のアンケートなどを通し、自分の学びを振り返り、言葉にする機会があった	83.67	3.16

自由記述回答(生徒)※一部抜粋

とても満足している	<ul style="list-style-type: none"> ●説明や演習もわかりやすく、質問の対応も早いので理解しやすいから ●遠隔ではあるが専門的な知識を持つ先生に教えていただけるので、とてもわかりやすい ●みんなで考えてコミュニケーションをとり、問題を解決することができたから ●対面と変わらないくらい先生との距離が近いと感じたため。 ●先生の授業は分かりやすく面白いし、ペアやグループで意見交換をする時間もあるし、リアクションで先生とコミュニケーションを取るのが楽しい ●パワポなどで写真を見せながら説明してくれるから。 ●先生とのレベルの高い授業がとても身になったと感じるから。また、授業の中で先生が話をしてくださったり、私達に意見を求めてくださったりする中で、積極的にコミュニケーションを取ることができて、個人的にすごく楽しかったから。 ●テスト期間もリモートで対応してくれたりして丁寧に分かりやすいから
やや満足している	<ul style="list-style-type: none"> ●先生の教え方や進む速度には問題なく、わかりやすく説明してくれているが、自分の理解度がまだ足りていないためやや満足 ●たまに進むのが早くてわからなくなる時があるから。 ●スプレッドシートに自分の言葉でまとめることで聞きより理解を深めることができた。 ●遠隔だけれど生徒と一人一人に向き合ってくれたから。 ●直接聞けないことも遠隔なら個人のチャットで聞けるからです ●チャットを使って、間違えても良い場があったから。 ●遠隔授業であっても、チャット機能を活用するなど生徒に合わせて授業を進めていてよいと思った。
あまり満足していない	<ul style="list-style-type: none"> ●パソコンの操作がうまくいかずに焦ることが多かったので、対面のほうが個人的にはやりやすいと感じるから ●授業のペース配分を最初の方で間違えたのか、後半は「あとは自分でやってね」ということが多かった。 ●遠隔だと放課後などに勉強しているときに気軽に聞けないので、とてもやりにくいと感じた。 ●対面のような緊張感がなく、眠たくなる ●ごたごたしたり、もたついたりするときがあるから ●遠隔授業の時、画面が止まって授業ができなくなったりする。
全く満足していない	<ul style="list-style-type: none"> ●デジタル上では内容が入ってこないしノートを書きたくても次々進むためかけない。 ●黒板ではずっと残っているのでノートを書くスピードが遅くても後で書けたが画面上ではもう見れないのでノートが書けず内容を理解できないまま授業が終わる。 ●終わった板書はロイロノートに配信されているが画面を分割してノートを書こうとしても画面が小さくなるため見えないし、その裏では授業が進行するため結局、ノートもかけない、授業理解できないループにはまる。 ●授業が止まることがある

授業実践の工夫に対する生徒の認識と授業満足度

○各工夫項目の実施について「あてはまる」場合と「あてはまらない」場合の肯定的な満足度（「とても満足」「やや満足」と回答した割合）

▶生徒が授業の工夫が「あてはまる」と認識した場合、いずれの項目でも授業満足度は9割以上と高く、
実践上の工夫と満足度には関連があることが示唆された

質問項目	あてはまる	あてはまらない
授業の流れや目標がはっきりと示されていた。	95.90	54.55
自ら活動する時間が十分にあった。	95.53	27.27
クラスメイトと活動する際に、自分の役割がはっきりと示されていた。	95.67	71.42
共同編集ツール上で、共同制作を行ったり、クラスメイトの意見や考えを確認し、取り入れる機会があった。	94.96	92.16
他校生徒や学校外のゲストとつながる機会があった。	94.62	85.77
配付資料や授業記録にインターネットを介していつでもアクセスすることができた。	92.23	70.59
同じ活動でも複数の取り組み方（手書き／デジタルなど）の選択肢が提示されていた。	94.28	73.53
先生はチャットやメッセージ機能などで個別に学習をサポートしていた。	95.83	80.95
先生は生徒一人ひとりに目を向けて、コミュニケーションしていた。	96.33	44.83
先生は自分やクラスの良いところについて積極的に声をかけていた。	96.61	44.45
先生は積極的に自分の話（自分の考えや体験の話）をしていた。	91.78	75.00
授業中は複数の方法（チャット・メッセージ・リアクションボタンなど）から選んで先生とコミュニケーションをとることができた。	97.54	76.25
授業後のアンケートなどを通し、自分の学びを振り返り、言葉にする機会があった。	96.25	68.58

読み方の例：

- 「授業の流れや目標がはっきりと示されていた」について、肯定的回答（あてはまる）をした生徒の授業満足度（肯定的回答）は95.90%
- 「授業の流れや目標がはっきりと示されていた」について、否定的回答（あてはまらない）をした生徒の授業満足度（肯定的回答）は54.55%



遠隔授業に対する生徒のレディネス及び満足度との関連

- ・遠隔授業において学習を進めるための生徒の準備状態を示す概念として、遠隔授業における「レディネス」を操作的に定義づけ、レディネスと授業満足度の関連について調査
- ・レディネスが低い生徒（低レディネス層）に対して、どのような授業上の工夫が効果的であるかを分析

■レディネスの構成因子

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
学習に対する自己調整力				
自分の理解度に応じて、先生から配られた教材を繰り返し学習する	.77	.03	-.03	-.08
自分の学習の進め方を自分で決めることができる	.65	-.05	.06	-.03
授業中に気が散り始めたときは、集中を保つよう特に努力する	.61	-.05	.02	.11
授業中に、予想外のことが起きても、あわてずにやるべきことを考える	.55	.08	.07	-.08
授業で学ぶことは、自分にとって重要である	.47	-.08	-.13	.40
授業の内容や学習の進め方が分かりにくいときは、自ら先生やクラスメイトに説明を求める	.39	.17	.06	.06
ICTスキルに関する自己効力感				
遠隔授業に必要なソフトウェア（アプリやword、excelなど）の操作が得意である	.02	.84	-.11	-.02
パソコンやタブレットにキーボードを使って文字を入力することが得意である	.09	.73	-.07	-.11
インターネットを使って学習に必要な情報を検索・収集することが得意である	-.11	.69	.07	.09
テキストやリアクションボタンを使って、自分の気持ちや考えを表現することが得意である	-.02	.50	.15	.11
知的好奇心・自己主張				
私は、何事にも興味関心が強い	.02	-.09	.86	.02
私は、新しい事に挑戦することが好きである	.02	.01	.79	-.05
私は、思っていることを言葉にして先生や友達に伝えることができる	.11	.22	.34	.05
遠隔授業へのマインドセット				
遠隔授業は高校生の学びの可能性を広げるものだと思う	.02	-.04	-.02	.82
遠隔授業が行われている目的について理解している	-.09	.05	.03	.73

◆生徒のレディネスと満足度の関連

- ①遠隔授業へのマインドセット ($p<.01$)
- ②学習に対する自己調整力 ($p<.01$)
- ③ICTスキルに関する自己効力感 ($p<.05$) の3つが有意に関連

◆低レディネス層における授業効果に関連する要因の検討

—レディネスが低い生徒に対して効果を促す工夫について—

①学習に対する自己調整力が低い生徒群

- ▶**個別的・多様なコミュニケーション手段や柔軟な学習選択**が満足度に関連する可能性

②ICTスキルに関する自己効力感が低い生徒群

- ▶**授業の見通しや分かりやすさ**が満足度に関連する可能性

③知的好奇心・自己主張のスコアが低い生徒群

- ▶**教員から一人ひとりに目配りをするコミュニケーション**が満足度に関連する可能性

④遠隔授業に対するマインドセットが低い生徒群

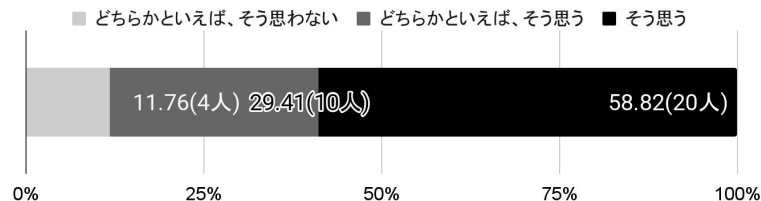
- ▶**授業者の自己開示や外部とのつながり**といった要素が満足度に関連する可能性

⑤大人数における低レディネス層への対応

- ▶大人数クラスでは、**共同編集ツールを用いた協働活動やチャット等による多様なコミュニケーション**が、満足度や学習理解、興味関心を支える要素となる可能性

遠隔授業を経験することによる授業形態および授業観の変容

今後、対面授業を実施するときに遠隔授業の経験が活きると思いますか



▶88.23%の教員が「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答

生徒理解・学習状況把握の向上	<ul style="list-style-type: none"> 遠隔では得られなかった生徒とのコミュニケーションにより生徒理解が深まる。 対面授業の時よりも、生徒のアウトプットされた成果物をじっくり見ることができているので。 生徒の学習理解状況に対するフィードバックがより細かくなった 遠隔授業では、対面授業と比較して制限があるので、そのぶん工夫の必要があった。例えば、ICTを活用した指導や、生徒の学習状況や生活状況の把握など。それは、対面授業を行う際にもいきてくると思われる。 基本的には、対面、遠隔でも授業の本質は同じ。「対面授業で見取りなどは、できていようできていなかった。」遠隔授業をして気づいたことが多くある。 遠隔では対面と異なり、生徒と直接触れ合えない分、生徒の回答や反応に敏感になったように感じる。 遠隔授業を意識すれば、対面での授業時に配慮が行き届くようになると感じるから。また、協働的な学びの実践ができたから。
生徒の多面的評価	<ul style="list-style-type: none"> 手元が見えないことから計算過程を把握できない事がずっとストレスだったが、試行錯誤の中で、記述で表現可能な科学概念の獲得の方が大事だと気づいた事。 評価について、多面的に生徒のよいところを積極的に評価できる気がする。
その他	<ul style="list-style-type: none"> 学びの機会保障に活かされる (遠隔授業で得たものは)無駄ではないが、具体的に言葉にできない。ただ授業方法や授業形態は一通りではなく、分野分野に合わせ利用可能なものが増えた。 遠隔授業で身につけたICTスキルを活かすことができると思うが、今の私の授業スタイルは、対面授業ではできない。(人数が多いことと、学校現場では他の教員から理解されないため)。

遠隔授業に取り組んだ教員からの声(今後に活きるポイント)

▶遠隔授業に取り組んだ授業者は、遠隔という環境の中で授業づくりを行うことで、授業構成力の向上や生徒の学習状況の理解等に関する成長を感じている

自由記述回答(教員)抜粋

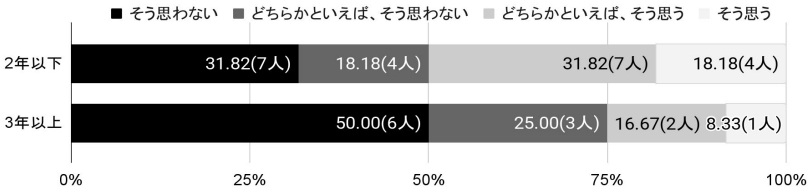
授業構成力の向上	<ul style="list-style-type: none"> どういった授業設計をすれば生徒が主体的に学習に取り組むことができるか、より深く考えるきっかけとなった。 様々な制限があるからこそ、授業の構成や活動の目的など、授業づくりの工夫について深く考えなければならない場面が多くある。また、遠隔という距離感だからこそ、自己の意思表示がしやすいという生徒もいることに気づいた。 事前準備に力を入れ、授業後の振り返りを行うため どうしても対面授業よりも1単位時間に伝えられる情報量が少なくなってしまうこと、2つ校間にまたがり授業をしていることから、情報の取捨選択や発問の工夫が必要不可欠であった。そのため、プリントが大幅に削減されたり、伝わりにくい事柄の補助資料作成や説明の丁寧さを追究したりしたことで授業の進め方の見直しや授業スキルの向上が一気に進んだと感じるため。 スピードを確保するための取捨選択、生徒が躓く場所に関するアンテナの精度アップ 綿密な時間配分、授業で取り扱う内容の取捨選択、生徒の主体的な取組を促す授業構成などをより意識するようになった。 制限された環境の中での必ず教えるべきことや把握しなければならないことを取捨選択ができるようになる 異なる教科書を持ち寄るペアがあり、問題を教科書をベースに扱うのではなく、学習指導要領をベースに扱う意識が強まった。単元指導計画についても以前のをスクラップして、一から作り直したことで自分の教材観がよりクリアになった。
ICTの活用による授業展開の発展	<ul style="list-style-type: none"> ICTを効率的に活用し、動画や画像を取り入れた場面をスムーズに取り入れ、生徒の興味・関心を深めさせることができると思うから。 動画やPowerPoint、チームスその他ICT使用のスキル。 苦手な機器類を使用して授業したことが活きると思います。 電子黒板等のICTを活用することで、今までにない授業展開を行うスキルを身に付けることができた。

遠隔授業に対する課題感・負担感

質問項目	「そう思う」・「どちらかといえば、そう思う」の割合	項目平均
「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」「どちらかといえば、そう思わない」「そう思わない」の4件法で回答を求めた		
対面授業に比べて、遠隔授業に関することで困ったときに相談できる人が少ない	41.18	2.18
授業を行う教員のICTの知識・スキルが不足している	41.11	2.27
授業を受ける生徒のICTの知識・スキルが不足している	23.53	2.03
遠隔授業に必要な配信側の機器・機材が不足している	26.47	2.00
遠隔授業に必要な生徒の機器・機材が不足している	47.06	2.50
遠隔授業を行うための十分な通信環境が不足している	58.82	2.56

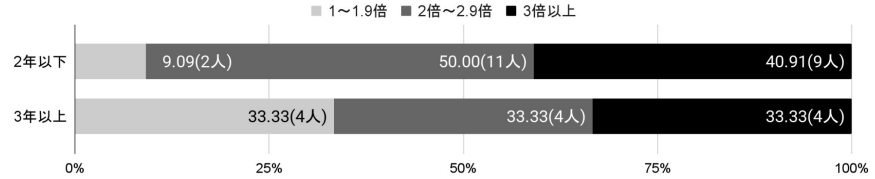
▶通信環境に関する課題意識が最も高く、依然として遠隔授業の課題

対面授業に比べて、遠隔授業に関することで困ったときに相談できる人が少ない



▶2年以下の教員は半数が相談相手の不足に課題感

対面授業に比べて、どの程度、授業準備に時間を要しますか



▶授業準備に要する時間は平均で2.44倍

*参考：R5年度COREハイスクール・ネットワーク事業報告書では、教材研究や授業準備に要する時間は、通常の対面指導に比べ約1.3倍という調査結果がある。本調査においては、「対面授業の〇倍程度」という数値を自由記述する設問による調査であることと、配信センター方式の普及により、配信専任教員の割合が大きくなったことも一因と考えられる

アンケート自由記述（抜粋）

教員のICT知識・スキル	<ul style="list-style-type: none"> AIや共同編集ツール、生徒が日常的に使用できるプラットフォーム等、遠隔授業で有用であるツールの活用において引き出しが少ない アプリケーション、AIの利活用の知識、音声や映像機材の知識 配信時にどのような媒体を使用するのが効果的なのか。 知識があれば、もっと多くのツール等から最適なものを選んで授業に活用できると思う。 機材の活用方法や様々なツールを活用しきれない点。 ネットワークから機材操作まで、これまで培っていない知識・スキルが必要な場面もある 様々なアプリを使いこなすことができない。例えば、Canva や MetaMojiなどは使ったことがない。使いたいとは思っているが、〇〇県では、一般的ではない。テクノロジーについていくのが大変だと思う。
生徒のICT知識・スキル	<ul style="list-style-type: none"> 文字の入力など基本的なことができない。 ファイルの格納場所、ショートカットなど スプレッドシートなどへの入力速度に差がある。ブラインドタッチやローマ字入力。 アプリケーションが分かりづらいこともあるが、流れを伝えても進めない生徒は一定数いる。(大人でも人それぞれなので、そこはどうしようもないが・・・) 機器やアプリ等に習熟するのは、教えている教科・科目の習熟とは異なる。例えばそれは筆記用具への習熟と似ていて、遠隔授業を行う場合に必要となるのであって、他の授業の際に必要となるとは限らない。 遠隔授業では目的ごとに（発表や評価など、場面ごとに）必要とされるアプリ等が異なることが往々にしてある。そしてアプリごとに想像以上の時間がかかる。生徒が使い慣れたアプリを使いまわす工夫が、教員には求められる。
配信側の機材	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の音声を拾うマイク。配信側の電子黒板。 カメラ、マイク、巡回ロボットなども効果的だと思うれる metamojiの様なリアルタイムで手元を見れる手段 モニタリング用の別端末。そんなにスペックは高くなくてよい。 ハイスペックなPC 授業中にかたまらない通信機器。 手もとを映すようなカメラなどがあればよい。また、遠隔授業専門のスタッフがいらっしやるとなお良いと感じる。 スイッチャー等
受信側の機材	<ul style="list-style-type: none"> 大き目の机。小さい机でするには限界がある。 生徒の表情や手元の様子を鮮明に映すことができるカメラ 教室後方に位置している生徒の声を聞き取ることができる高性能マイク 生徒の一人一台端末が十分に使用できない（起動時間、充電時間、処理速度など） タブレット用のペン 授業中にかたまらない機材。

大人数授業への対応

調査概要

大人数の授業では、生徒一人ひとりの学習状況の把握が難しくなることや、集中力の維持、個別対応の実施に制約が生じることなどが課題として指摘（※）

遠隔授業を担当する教員への聞き取りや情報交換の場で共有された内容、ならびに実際の対応事例をもとに、大人数授業において想定される課題を整理

大人数授業の課題への対応策

○オンライン分科会および各地域へのヒアリング調査より

カテゴリ	具体的な対策・工夫の内容
デジタルツールの活用	<ul style="list-style-type: none">●学習管理・共有アプリ：Google スプレッドシートやフォームで回答をリアルタイム収集し、参加状況を可視化する。●生徒の近くで活動を把握する工夫：専用機材やブレイクアウトルーム機能を活用し、活動の様子を個別に見ることができる環境を整備する。
支援員との連携	<ul style="list-style-type: none">●支援員との役割分担：受信校の支援員に机間巡視や個別の声掛けをお願いする。
指導法の工夫	<ul style="list-style-type: none">●授業設計の工夫：教材の提示→生徒による活動 という流れの授業設計にすることで、生徒のリアクションをつがさに拾って、調整する必要がなくなる●アウトプットを重視した授業の設計：過程のすべてを見取ろうとするのではなく、提出された成果物（産物）へのフィードバックに注力する。●グループ学習・仕掛け：グループ活動やチャット活用により、生徒が能動的に活動ができる工夫をする。●学習ポータル等で理解度を把握しながら、協働によるフォローを促す●オンデマンド動画の活用：教科書の内容をまとめたスライドやオンデマンド動画教材で理解を促す
生徒同士の協働によるフォロー	<ul style="list-style-type: none">●生徒間の協働を促す：受信教室に理解が不十分な生徒を助ける「小さな先生役」になる生徒がいれば、フォローが行き届きやすくなる
教員側の意識の変容	<ul style="list-style-type: none">●優先順位の線引き：対面の100%再現を求めず、遠隔の制約を受け入れた上で「どこを重点的に目指すか」を判断する。●生徒の主体性を育てる意識：対面授業との環境の違いを自覚させ、生徒自身が能動的に授業に参加するよう、主体性・積極性を育てていく必要性

（※）令和3年度から5年度にかけて実施された調査研究事業（「COREハイスクール・ネットワーク構想」事業）での実証においては、配信側の教員が生徒の学習状況を同時に見取ることができるのは、大型ディスプレイ越しに生徒の様子を確認する場合で最大5名程度、1人1台端末を活用した画面共有機能や共同編集機能等による場合で最大15～20名程度とされている

大人数への対応における実践事例

【事例】生徒の近くで活動を把握する環境整備

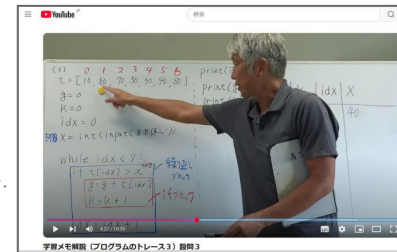


机間巡視支援アパターの活用
配信側から遠隔操作によって任意の座席付近へ移動させて会話

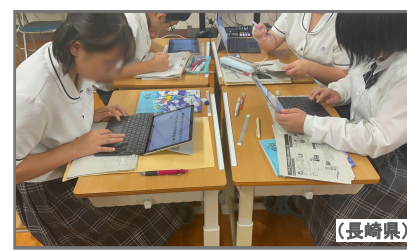


ブレイクアウトルームの活用
教室前方のメインディスプレイとは別に、小型端末を教室内に設置

【事例】授業設計の工夫／オンデマンド教材の活用／受信側教室との連携



個人で視聴できる動画教材を活用し、授業中に生徒が自律的に活動する時間を増やす



オンデマンド動画を活用した演習中心の授業設計。受信側教室の教員と連携し、活動するグループの編成等を行う

遠隔授業配信教員への支援

令和7年度は遠隔授業の配信教員同士の横連携機会を複数設け、各地で実践に取り組む授業者がお互いの知見を共有することができる機会を設けた。これらの横連携機会を契機に、地域を超えた合同授業や、継続的な情報連携を自立的に行う事例もみられた。

横連携機会の創出（各種分科会・合同ミーティング）



1. 対面参集ミーティング（8月）
 - ・ 授業実践の相互発表
 - ・ 遠隔授業の支援ツールに関するアイデア出し
2. オンライン分科会（6月・10月・11月・2月）
 - ・ 教科／科目別分科会（観点別評価の方法）
 - ・ 遠隔授業ツール活用勉強会
 - ・ 年度末合同振り返りワークショップ

横連携を契機にした協働

●地域を超えた合同授業



高知×鹿児島（英語）の合同授業

●継続的な情報連携

・ 物理科、生物科等における実験の方法等の継続的な情報共有

●相互授業参観

・ 他地域の教員の遠隔授業をオンラインで相互に観覧し意見交換

配信教員からの声

- 様々な視点で授業改善に取り組まれていることがわかり、興味深かったです。まだ定型がないからこそ、授業を見つめ直すチャンスであるということを再認識することができました。
- 他県の先生方の事例を伺うと、授業の本質的な部分をどこまで遠隔授業で実現できるかがあらためて大事であると感じました。
- 「新しく遠隔担当になる人に何を伝えたいか」という問いは、自分たちが遠隔で何を大事にしようとしているのかを考え直す問いでもあると感じました。この視点でもう一度自分たちの課題を整理し直してみようと思います。
- その中で遠隔授業が（対面授業と比べて）得意とする場面、苦手とする場面を見極めて、授業をデザインしていきたいと感じました。
- 対面での接点もできたことによって、情報交換がしやすくなった。全国でも取り組みが少ない分野なので、実践発表や意見交換を通して互いに知見を共有できる機会は貴重であると思う。
- オンラインで会ったことはあっても、対面で直接お会いして情報交換するというのは貴重な機会だったため。また発表という機会を与えていただいた。
- 他県における遠隔授業の実状を垣間見ることができた。
- 直接遠隔授業に関わる先生方と対面でお会いすることができ、オンラインで会うだけではない、強い繋がりができたように感じる。
- 教科に関しては相談する相手が少ないため、貴重な機会になった。
- 遠隔授業を行う際のシステム自体が違っており、いろいろな方法があることが垣間見れた。
- 同じ教科で、全国的に相互に生徒に発表の機会を与えられるような仕組み作りをしていきたいと思うので、その1歩として、良い機会を与えていただいたと思っています。
- 遠隔授業ならではの教科の悩みを共有できた。

今後に向けて

- 各地域で遠隔授業に取り組んでいる教員は、1自治体あたりの人数が限られている場合が多く、校内や自治体内だけでは実践に関する相談や意見交換の機会が十分に確保されにくい状況がある。
- 今後の自治体の枠を超えた教員同士の横の連携を促進し、実践知を共有する場を設けていくことが求められる。

巡回型による対応

調査概要

遠隔授業の受信教室における体制の在り方に関する研究を行う場合にあっては、「学校教育法施行規則の一部を改正する省令等の施行等について」（平成27年4月24日付27文科初第289号 初等中等教育局長通知）により、受信教室に当該高等学校等の教員を配置すべきこととされている教員を配置せずに教員以外の当該高等学校等の職員を配置することや、当該職員を常駐以外の方法によって配置することもできるものとされている（いわゆる巡回型）。本項では巡回型に関する調査結果について、各地の状況から整理する。

実証期間内においては、高知県・鹿児島県で巡回型による試行を実施（約60回）

観点	
実施科目	数学Ⅱ、数学B、物理、論理・表現Ⅰ、Ⅱ、英語コミュニケーションⅡ
対象学年	2～3年生
実施事例受講人数	【高知県】2名 【鹿児島県】4～10名
実施回数	合計60回程度
離席時間	1コマあたり35～40分程度
実施前の準備事項	・ 配信センターから説明会を実施 ・ 緊急時の対応方法の検討（内線電話／トランシーバーの活用） ・ 通信不良に備え、1人1台端末を持参・校内における対応方法等の周知の徹底 ・ マニュアルの作成・配付、緊急時の対応方法の共有・掲示
離席中の対応方法	・ 生徒への離席時の所在の周知 ・ Googleチャットを活用した配信教員との連絡 等

所感	
配信側	・ 特に問題はない（生徒の実態による） ・ 実際に実施した配信教員は巡回型での対応について「可能」と認識
受信側（生徒）	・ 困ったことや要望は挙がっていない【共通】
受信側（立会者）	○支援員ヒアリング（メリット） ・ 自席でなければできない業務に対応できる。 ・ 急な公務への柔軟な対応が可能。 ・ 教員の負担軽減につながる。

巡回型の成立要件(考察)

両地域における実証をもとにヒアリングを行い、以下の要素を抽出

(1) 受講生徒の条件および人数規模

- 受講生徒数は、配信側が画面上で生徒の様子を把握し、必要に応じて1対1の双方向のやり取りを行う時間を確保できる規模とすることが望ましい
 - 本実証においては、おおむね10名程度以下が一つの目安となった
 - 生徒が落ち着いて受講でき、常時の個別対応を要しないなど、一定の自律的な学習が可能な環境であることが望ましい

(2) 事前の連携および緊急時対応

- 実施手順を事前に明確化し、受信側と共有すること
 - 緊急時の連絡方法や役割分担等を資料やマニュアルの形で整理し、配信側と受信側の間で共有することが望ましい
 - 生徒にも十分に周知し、緊急時対応を事前にシミュレーションさせることが望ましい
- 緊急時の対応が行いやすくなるよう環境面を工夫すること
 - 受信側の教室は、緊急時に教職員が迅速に駆けつけられるよう、職員室の近隣に設置するなどの工夫を行うことが望ましい
 - トラブル発生時に関係者が即座に連絡を取り合えるよう、無線機等の機材整備・活用を行うことが望ましい
 - 1人1台端末を活用し、生徒と個別にやりとりができる環境を整えることも考えられる

(3) 実施可能なタイミングの明確化

- 巡回型での対応を実施する授業や時期は、あらかじめ配信側と受信側で共有しておくこと
 - 年度当初の授業や、通常と異なる授業形態・新しいツールを使用する場合など、生徒や教員が不慣れな状況においては、巡回型ではなく受信側での支援を伴う形とすることが望ましい

「見取り」の定義に関する調査

課題

遠隔授業において、「見取りの難しさ」が多くの地域から共通して言及されてきているが、「見取り」という言葉は多義的であり、配信者教員が具体的にどのような点に困難を感じているのか、その実態が把握しづらい

調査

授業者が考える「見取り」の定義・意味内容の分類

- 配信者教員を対象とした「見取り・評価」に関する分科会の機会に合わせて、アンケートの実施および対話を通じた聞き取りを行った（2025年9月～10月）

配信教員の声から「見取り」の要素を抽出

見取りの定義	定義の概要
1. 学習内容・思考プロセスの把握	学習内容の理解度、結論に至るまでの思考回路や計算過程、試行錯誤の様子を捉えること。
2. 学習態度・意欲・心身の状態の把握	授業への主体的・積極的な姿勢、表情、発声、つぶやき、健康状態などの多角的な観察。
3. 個人の変化の把握	授業前後での変化や、生徒がどの場面で何をきっかけに変わったのかという成長の軌跡を捉えること。
4. 個人背景・人間関係等の把握	家庭環境、進路希望、他教科の学習状況、生徒間の相互関係など、学習を規定する背景の理解。

遠隔授業において、今後考えられる工夫（例）
・ 直接見えない思考過程を、デジタルログに置き換えて把握する必要がある。また、思考過程を細かく把握できるよう、小問を設定するといった作問の工夫も考えられる。
・ 非言語情報が乏しい中で「声を拾う仕組み」を多層化することで五感に頼りすぎない把握のシステムを構築する必要がある。また、一人一台端末での授業参加も有効である。
・ 評価基準の明確な設定、定期的なデジタルでのリフレクションの導入や提出物回収等を通じて、アウトプットを継続的に比較し確認できる仕組みを整える必要がある。
・ 配信側からは見えない受信校の学習環境や学校生活の実態を、授業前後および対面授業の機会を通して意識的に情報収集していく必要がある。

● 今後に向けた提案①

- 遠隔授業における「見取り」を検討する際は、「見取り」という包括的な言葉を用いるのではなく、「学習内容の把握」「心身の状態の把握」など、対象を明確にした表現へと置き換えていくことが考えられる。言葉を具体化することにより、遠隔環境において何が可能で、何に工夫が必要かをより具体的に議論することができる。

● 今後に向けた提案②

- 「見取り」の前提となる指導観についても検討が必要である。たとえば教員が直接観察し把握することを前提とするのか、それとも学習者の自己調整やデータ活用を組み込んだ形で把握の在り方を再設計するのかによって、求められる手立ては異なる。
- 各地域の状況や目指す授業のあり方に応じて、学びの過程を把握する方法を調整していくことが重要である

学習機会保障型(遠隔授業) -不登校生徒を対象とする遠隔授業

調査

不登校生徒に対する遠隔授業の対応について各地域へのヒアリング調査を行い、いくつかの地域から具体的なケースおよび対応方法に関する情報提供を受けた。

不登校生徒を対象とする遠隔授業の運用方法

対応を行った各地域の管理機関および学校関係者への調査より

観点	内容(サマリー)
①校内規程の見直し・ルール整備	<ul style="list-style-type: none"> ・教務内規を見直し、遠隔授業による単位認定および出席扱いを明確に位置付ける。 ・校内会議で、遠隔授業の実施、出席認定、実施困難科目への補充指導等について合意形成を行う。 ・参加時のルール(画面ONの要否、チャット活用、実施時間外はカメラ・マイクOFF等)を実施要項として整理し、教科間で共通理解を図る。
②対象となる生徒の決定および本人・保護者への説明	<ul style="list-style-type: none"> ・担任、副担任、教務主任、SSW等によるアセスメントを実施し、生徒の状況や学習意欲を総合的に判断する。 ・管理職・教務主任を含めた面談により、学ぶ意欲や進級希望、実施条件を確認し、本人・保護者の了承を得る。 ・実施方法、できること・できないこと、留意点を丁寧に説明する。 ・受信場所は別室・自宅受信も含め状況に応じて柔軟に判断する。
③遠隔授業の実施方法	<ul style="list-style-type: none"> ・教室に端末を設置し、授業時のみ電源をON、休み時間はOFFとする。 ・専用端末や予備機を整備し、移動教室時は係の生徒が運搬するなどしている。 ・学習ポータル上にチャットルームを設け、教材配付や連絡を一元化する。 ・カメラやマイクのON/OFF等について心理的負担に配慮する。
④評価の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・教科ごとに協議し、評価方法を個別に検討する。 ・対象生徒を担当する教員団で事前に情報共有を行う。 ・遠隔授業内で評価可能な活動、課題・レポート等を評価材料に算入する。
⑤教員間の連携	<ul style="list-style-type: none"> ・実施の過程においても、対象生徒を担当する教員団で定期的な(例:月1回程度)情報共有を行う。 ・必要に応じて、教員の端末操作やアプリ活用に関するサポートを行う。

▶各学校において実施のルールを整備し、学校で実施されている通常授業をライブ配信する形で生徒の実態に応じて柔軟な対応を行っている事例が複数確認された

不登校生徒を対象とする遠隔授業における現場の課題意識

観点	内容
教員の意識・学校文化	<ul style="list-style-type: none"> ・教員間に「学校には来るべきもの」という意識があるため、病気療養中などのケースに比べて、遠隔授業での対応理解が得られにくいと感じる。 ・遠隔授業を認めると、安易にそれを利用する生徒が増えるのではないかと懸念がある。
評価・成績処理	<ul style="list-style-type: none"> ・定期テストの結果を重視する傾向があり、平常の授業参加や成果物をどう評価に反映させるかについて、教職員間で合意形成が難しい。 ・実技・実習について、対面指導ができない場合、課題の提出のみで出席と認めてよいのか。 ・普通科の体育や芸術などは、レポート提出や自宅での制作で代替評価が可能だが、工業・農業・海洋高校などの産業系学校では、設備や実習の性質上難しい。 ・観点別評価の規準等について共通理解が図られていない。
実施体制・運用	<ul style="list-style-type: none"> ・学校長や管理職がリーダーシップを発揮しない限り、反対意見を調整して実施に至るのは難しいと感じた。 ・実施にかかる通知や基準は出されているものの、最終的には校長判断に委ねられており、実施を促すメッセージがさらに必要と感じる。 ・対象生徒の学習意欲や状況をアセスメントし、適切に選定することが必要。 ・対象となる生徒・保護者への情報提供や声掛けのタイミングが明確でない。
学習状況把握の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・カメラオフやチャットのみでのやり取りでは、生徒の活動実態を十分に把握しきれない不安がある。 ・双方向型の授業になりづらく、授業の質担保が難しいという声がある。
円滑に実施するための機材環境	<ul style="list-style-type: none"> ・学校側に遠隔授業を行うためのWi-Fi環境、カメラ、三脚などのハードウェアが整っていないケースがある。
生徒への配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・登校している生徒から不満が出たり、それが受信側の生徒に伝わったりしないよう、事前にクラスへの説明や、休み時間の接続オフなどの細かなルール作りが求められる。

- 制度や技術的な課題だけでなく、学校文化や教員の意識も実施のハードルになっている場合が多い。
- 生徒の学習状況を把握しづらいため、クラウドツール等を活用して学習過程や成果物を共有することが有効になる。また、生徒が学習についていけるよう、教員へ質問しやすい窓口や相談の場を設けるの取り組みも重要となる。
- 実技・実習を伴う科目など、教科の性質によっては遠隔での対応がそもそも難しい場合もある。この点については、代替的な評価方法の検討や対面指導との組み合わせなどを含め、今後も検討を要する。

不登校生徒を対象とする通信教育

調査

不登校生徒を対象とする通信教育について、各地域へのヒアリング調査を行い、いくつかの地域から具体的なケースおよび対応方法に関する情報提供を受けた。

全日制高校における通信教育の実施事例

観点	事例
対象生徒・期間	・ 第3学年 ・ 実施期間：11月～2月（約100～120時間分） ・ 対応科目：10科目程度
登校頻度・本人の意向	・ 登校頻度は時期により変動あり ・ 卒業への意向あり
教務規程の整備	・ 教務規程において「支援が必要な生徒の授業時数の扱い」について明記 ・ 認定基準（添削課題1回提出を単位時間分とみなす等）を設定
対象生徒の決定	・ 校内の支援委員会で経過観察し、医療機関とも情報共有を行いながら通信教育へ移行
添削課題	・ 評価の観点を含めたプリント作成し配付（紙媒体・電子媒体）
面接指導	・ 登校状況に応じ随時実施。実習教科の個別指導や担任面談でフォロー
学習状況の把握	・ 登校した際に、本人の課題プリントへの取組および教科担当の個別指導、担任等による面談から学習状況を把握
評価方法・結果	・ 課題の成果、個別指導での様子、面談、一部出席できた授業での状況を合わせて、1年間を通した総合的に評価

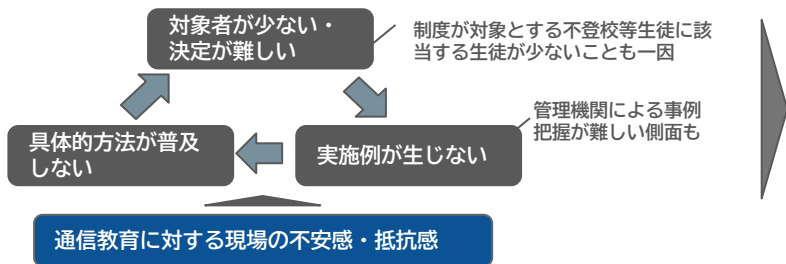
▶**実証期間中において事例が観測されたのは2例であり、事例が広がるには至らなかった**
(通信制高校との連携を目指した地域もあったが、実施には至らなかった)

全日制高校における通信教育における現場の課題意識

分類	主な意見・課題内容
全日制高校の在り方との関係に関する認識	・ 全日制高校は、毎日出席し学校で学ぶことを前提として入学しているという認識があるため、通信制の仕組みに近づきすぎることが入学時の保護者や生徒の期待に沿うものか疑問がある。 ・ 遠隔授業は授業形態の一つとして理解されやすいが、通信教育はそもそも全日制高校には適さないのではないかという認識がある。 ・ 他の生徒との公平性が担保できるのか、評価基準が異なるのではないかと、生徒が一人で課題に取り組めるのかといった点に対する不安がある。 ・ 教室以外で行われる学習活動による学びの質に対して心理的な懸念がある。 ・ どのような状態・段階の生徒に活用するのが最適か、現場で判断することが難しい。
対象となる生徒選定の難しさ	・ 検討している間に生徒の状況が変化し、対象外になることがある。 ・ 実施する対象について明確な基準がなく、判断に迷う場面がある。
単位認定および制度運用上の課題	・ 単位認定における出席日数の扱いや添削指導、面接指導の位置付けなど、具体的な運用整理が難しい。 ・ 学習指導要領を基準とすることは理解しているが、それで十分かどうか不安がある。 ・ 出席の考え方や内規の整備を進めるにあたって具体例が不足しており、運用が円滑に行われていない。
教員負担および体制面の課題	・ 添削指導や面接指導など業務が発生し、教員負担が増大する懸念がある。 ・ 県が整備した通信教育の活用方針が十分に伝達されていない学校があり、校内の共通理解が形成されていない。

▶**全日制高校における通信教育に活用は、具体的な実施方法の構築や現場からの通信教育に関する不安感等の課題が大きく、普及には多数のハードルがみられた**

不登校生徒に対する通信教育の課題構造



今後求められる方向性

観点	内容
1	現場の実態把握および具体的手法の周知 ・ 本制度を活用した通信教育の具体的実施にかかる基準等の周知 ・ 全国的な実態調査および運用方法の周知 ・ 制度自体に対する説明会や研修等を通じた再周知
2	即時対応を可能とする体制整備 ・ 支援の開始までに時間を要することがないように、即時対応が可能な体制や、標準的な運用方法を整備
3	チームによる判断と他機関との連携 ・ 対象者の選定や支援方針の決定にあたっては、専門職や外部機関と連携した体制を組織することが望ましい

本事業を通じて見えた成果

○教科・科目充実型の遠隔授業

- ・配信拠点の構築事例および改善に向けたポイントの整理
- ・遠隔授業の実践における多様な授業づくりのポイントおよび事例把握
- ・遠隔授業の満足度・学習理解度等に影響する要因の分析

○学習機会保障型の遠隔授業・通信教育

- ・具体的実施事例および運用のポイントの抽出
- ・取り組みが広がりづらい要因となっている現場の課題抽出

○地域を超えた連携協働の事例

本事業を通じて見えた壁（垣根）

1. 高校教育の前提（授業観・学び方）

- ・対面授業や教室での学びを基本とする授業観
- ・高等学校の単位認定における履修・修得に対する考え方の前提
 - ▶新しい学びの形に対する現場の心理的な抵抗感・不安感

2. 制度的・基盤的ハードル

- ・制度の活用事例・アイデアが不足しており現場が実践に踏み出しづらい（通信教育）
- ・人員や機材等の基盤的整備の必要性（教科・科目充実型の遠隔授業）

垣根を超えた学びの実現に向けて今後求められること

1. 具体的事例の提示および展開

- ・遠隔授業・通信教育を活用した単位認定の事例など、実際の運用方法を示すことによる現場の不安の軽減

2. 管理機関と実践者双方の横連携

- ・遠隔授業・通信教育の普及には、管理機関同士の連携と授業を担う教員同士の連携の双方が必要
 - ▶自治体間で制度運用や実施方法に関する課題を共有し、管理機関が多様な発想やアイデアを得られること
 - ▶各地域が直面する問いや課題を共有し、成功・失敗の経験から学び合い、集合知を形成すること
 - ▶実践者同士の情報交換機会の創出により多様な実践が生まれる基盤をつくること

3. 遠隔授業・通信教育の推進に向けた制度的・基盤的支援

- ・遠隔授業の柔軟な受信体制の制度化に向けた検討
- ・通信教育に関する実態調査と事例共有による継続的な制度周知
- ・配信教員の確保や通信環境の整備など、実践を支える基盤的資源の整備
- ・生成AI、学習ログなど先端技術の活用をふまえた発展的可能性の検討

